



図4 KUGのスペクトル例

左は1.1型のKUG 1653+365 (NGC 6255), 右側は3型のKUG 0239+345 (NGC 1050)のスペクトル。いずれも岡山観測所 188 cm カセグレン II 分光器で撮影。300 本/mm のグレーティングを使い、分散は約 210 Å/mm である(プリントの引伸倍率が左と右で少しちがうのに注意。なお赤方偏移は左が 0.0021, 右が 0.0121)。

NGC 604 の中には数十個のウォルフライエ星の存在が推定されており、この領域で約 400 万年前に爆発的な星

の形成が行われたという解釈がなされている。

われわれは U 像の G, R 像に対する明るさの程度、すなわち色指数の大小によって、紫外超過の強いもの (s), 弱いもの (w), 中間のもの (m) という評価を各 KUG に対して与えている。この紫外超過と形態特性を対照してみると、1.1 と 1.2 は s が多く、1.3 は m, 1.4 は w が多いという相関がある。すなわち H II 領域が顕著なものほど紫外超過度は大きい。つぎに 2 では (2.1 も 2.2 も) s のものが 2/3, m のものが 1/3 といった割合であり、3 では s と m が半々となっている。さらに 4 は少くて何ともいえないが、s と m とがある。

図4にKUGのスペクトル例を示した。左側は1.1型のNGC 6255, 右側は3型のNGC 1050のスペクトルである。比べてみてちがうのは、左側では [O III]_{4959, 5007} の輝線強度の方が Hβ 輝線強度より強く、右側ではそれが逆になっているのと、右側では Hα の脇の [N II]₆₅₈₃ がかなり強く見えることであろう。

サール (1971) によれば、Sc 銀河では、H II 領域の輝線スペクトルの [O III]/Hβ 強度比は、銀河中心からの距離 r の小さいところで小さく、 r とともに増大する。一方バービッジ夫妻 (1962, 65) は、[N II]/Hα の比が諸銀河の外側では小さいのに、中心部では大きいことを見出した。H II 領域が中心から離れたところにある1型(や2型)と、中心部にある3型のKUGのスペクトルにも、このような違いがよく示されているわけである。

なお野辺山の 45 m 電波望遠鏡での電波観測プログラムに KUG の観測も採用され、その結果が楽しみである。

雑報

南都暦関係の「吉川家文書」の保存

南都暦(奈良暦)の暦師、陰陽師であった吉川家の文書が「吉川家文書目録」として、奈良市史編集室から、1982年3月、まとめられ、目録がだされた。

この文書は、故吉川家当主浩氏が、代々、保存されてきた文書を整理したいと望んでいてはたせず、未亡人の加じさんがその意志を受け、市史編集室に依頼したものである。

「吉川家文書目録」は B5 版、44 頁で、目録・資料・解説から成り立ち、「資料」では、文書の中で特記されるものについて全文が掲載されている。「解説」で、「吉川家文書の伝来」として、吉川家の歴史、文書の概要。「奈良暦について」として、中世の奈良町と暦、近世の奈良暦、奈良暦の終焉がまとめられている。

目録点数 866 点で、奈良暦、大経師写本暦、近代の暦、具注暦、暦道及び陰陽道関係文書の他に、領暦廃業の後の筆墨商経営文書にわけられる。主なものをあげると、領暦者に幕府天文方から、版行許可書として暦版校合

(校正)後に発行された「押切」が 17 通残されている事。奈良暦頒行部数や、暦師達の諸入費が書かれている慶応 4 年 (1868) の「仲間方毎年諸入用帳」。又、明治になり、太陽暦改暦の後、伊勢神宮から、国家暦として、本暦が頒行 (明治 16 年暦) されるまでの頒暦の変遷における頒暦者側の資料が多くあり、明治前期の頒暦統治の変化がつかめる。奈良暦は途中、五年次分が欠けているが、延享 3 年 (1746) から明治 4 年 (1871) まで残されている。

現在、南都暦の最古のものは、応永 14 年 (1407) の片仮名暦とされている。貞享暦改暦の後、天文方作暦の暦草の領布先を江戸、伊勢、三嶋、会津、奈良、京都大経師の暦師に限った。

南都暦は大和地方に限られて売られていた暦で、陰陽師、暦師が住んでいた町は、奈良市陰陽町として残されており、現在、陰陽師、暦師を生業としていた家は、吉川家と、もう一軒だけである。

頒暦に関する資料として残されているのは少ない。その中で、南都暦が広められていたゆかりの地で、南都暦に関する文書が、目録と共に 1 カ所にまとめて保存される意義は深い。(伊藤節子)